

旅行案内記（ガイドブック）から旅行記へ

イポリット・テーヌの *Voyage aux Eaux des Pyrénées* と
Voyage aux Pyrénées

た　ぐち　あ　き
田　口　亜　紀

はじめに

近代観光の初期形態は19世紀イギリスに現れた。産業革命による輸送手段の進化、とりわけ鉄道の発明と鉄道網の発展により、旅は、特権階級や特定の集団に限られていたものから、だれもが享受できる楽しみになった。金と時間がかかる旅が、低価格化、時間短縮によって、実現可能となったのである。

旅を促す要因には、外的要因、内的要因がある。強制された旅ではなく、自由意志で行う旅については、観光学の分野で経済、情報、イメージに関する研究が行われている。旅行案内記（ガイドブック）は、役立つ情報を満載し、読者を未知への場所に誘う重要なツールであるが、ヨーロッパ、特にフランスでこれが普及したのは19世紀である。旅行記もまた、読書によって想像の旅に誘うだけでなく、読者を実際の旅に導く役割を果たした。では、旅行案内記（ガイドブック）と旅行記は、情報誌と文学のように、明確に区別できるのだろうか。フランスの文芸批評家イポリット・テーヌ（1828-1893）は同じ土地について、同じ素材を用いて、旅行案内記と旅行記を書いたことから、この疑問への検討材料を提供してくれるだろう。

本稿は、フランス19世紀における旅行案内記と旅行記の具体例を比較対照し、分析することで、メディアとしてのそれぞれの役割と、そこで想定される旅の諸相を明らかにすることを目的とする。その具体例として、イポリット・テーヌのピレネー旅行についての記述を取り上げる⁽¹⁾。

1. 旅行ガイドブックの変遷

ガイドブックは、実用的な知識と最新の情報を満載して、当該分野の案内をする書物である。フランス語の *guide* は広い分野を網羅するが、例えば専門家名簿、専門店一覧、旅

に必要な旅程表まで実にさまざまである。旅に必要な情報が収録されているのも guide である。1552年にエティエンヌ・シャルル書店から出版された *La Guide*（書名の guide は女性名詞）には、都市の説明とフランス全国の地名を記した行程表が掲載されていた⁽²⁾。また、1817年にパリで出版された *Le Guide des voyageurs*⁽³⁾には、都市間の距離、人口、旅程、宿場、都市の説明、集団もしくは個人でおこなう遊戯（言葉あそびなど）が掲載されている。

タイトルに guide を冠せずとも、旅行案内記として書物は流通していた。Le Voyageur や Le Voyage で始まるタイトルである。リシャル（ライハルト）の *Le Voyageur en Allemagne, en Suisse, à Venise, à Amsterdam, à Paris et à St. Pétersbourg, par M. Reichard, avec une description...* は鉄道発明以前の旅行ガイドブックの代表である。フランスで鉄道網が普及する1840年代以前の旅行案内書としては、ほかにドイツのカール・ベデカーの仏訳がある。鉄道が発明され、移動手段が馬車から鉄道に移行すると、旅行案内書は内容のみならず、メディアとしての性格も変容するのである。

2. 鉄道文庫

イギリスで生まれた「鉄道文庫」を、ルイ・アシェットは1852年にフランスに導入する。アシェットはフランスの鉄道会社に「鉄道会社にも有利で、一般的にも有利で便利なものとなるような大規模な書店」づくりを提案する。「湯治の多くの人たちが異口同音に嘆いている鉄道旅行の単調さと退屈さが、ここでは駅構内書店設立のための有利な条件と見なされている」⁽⁴⁾のだ。

鉄道旅行の単調さと退屈をまぎらわすのが、読書だった。アシェットは長旅の間、乗客を娯楽へと向かわせることを思いつき、廉価で手頃な長さの「鉄道文庫」の発刊を決めた。これはペーパーバックの祖先である。「鉄道文庫」のラインナップの筆頭は旅行案内書だった。車中で読書ができるのは一等車と二等車の乗客であり、市民階級であった。

「鉄道文庫」は廉価で読み捨て、車中の暇な時間を潰すための娯楽であり、これから向かう旅先の情報源でもあった。移動する鉄道の車内で読むために、活字だけではなく、挿絵も多く挿入されることになる。「読む」本より、「眺める」本の方が、鉄道での読書には向いている。文字で埋め尽くされていた旅行案内記は、石版画の挿絵によって、ヴィジュアルの割合を増やしていく。

1840年代、アシェットはベデカーの路線を引き継ぎつつも、アドルフ・ジョアンヌに旅行ガイドブックの執筆を任せる。1857年には「ジョアンヌ・ガイド」が生まれることになるのだが、その前段階にも、アシェットは旅行案内記を刊行しつづけていた。ガイド

執筆ができそうなライターに声をかけていたのである。そして案内記の目的地も開拓されていく。

3. 旅行目的地・観光地としてのピレネー

旅の目的にはさまざまあるが、16世紀にはモンテーニュが日記に温泉の旅の記録を残しているように、「湯治」という目的があった。湯治の効用はヨーロッパで長いことよく知られていたが、フランスでは18世紀末から、湯治と転地による療法が本格的に取り入れられていた。ピレネー地方には温泉が多く、温泉保養地が発達していき、1850年代には多くの湯治客を集めていた。

同時にレジャーの草創期でもあった1835年には、ピレネー地方の都市ビアリッツが評判の海水浴場となる。「冬の街」アルカションには結核患者用の逗留地のための施設が作られた。カジノが建設され、散歩道が整備され、施設も豪華に作られている⁽⁵⁾。観光地として早くから発達していたのは、アルプス、ライン河地域であるが、ピレネー地方も温泉地としては歴史が古く、観光地へと発展していく。1840年代、フランスで鉄道網が発達したことにより、アクセスを容易にしたのである。

4. テーヌ略歴

1854年、イポリット・テーヌは喉の痛みを訴えたところ、医者のお勧めで、ピレネー山中に数週間の湯治に向かうことになる⁽⁶⁾。家庭教師で食いつなぎ、経済的に余裕のなかったテーヌは、高等師範学校（エコール・ノルマル・シューベリウール）の旧友に、著名な出版者ルイ・アシェットを紹介してもらう。アシェットのために、テーヌは「鉄道文庫」のガイドブックを執筆する約束を取りつける。原稿料で滞在費をまかなう算段である。彼は、野趣なサン・ソヴールと、「200軒の家と200軒の宿泊施設がある」⁽⁷⁾近代的なオー・ボンヌで一夏を過ごすことになる。体調の優れないテーヌは、「アシェットのために300頁のガイドを書かなければならない」⁽⁸⁾が、「アシェットの本のために、ピレネーにおける悪魔的ともいえる描写、会話、夢物語、幻想譚、伝説を書い」⁽⁹⁾た。これが *Voyage aux Eaux des Pyrénées* となり、1855年4月に刊行されることになる。

テーヌの妹ヴィルジニー（トルセー夫人）への手紙にはテーヌがガイドブックを書く際の苦勞を書き綴っている。「ぼくはこのジャンルと室内を描く画家ですが、いままでにないことをやっています。この呪われた本はぼくを苦しめています。ぼくは理屈に沿って考えることしかしてきませんでしたし、抽象的なことには慣れていません。しかし自分自身の

殻から外に出なければなりません。自分の思考方法を変えなければなりませんし、描写の文体を身につけなければなりません。もうひとつ不幸なことを挙げると、このジャンル（旅行案内記）の単調さです。描写に描写、10頁も書くと疲れてしまいます。ぼくはそれを300頁書かなければならないのです。本を読んでもらうために、出来事などを探して、できる限り挿入しなければならないのです⁽¹⁰⁾。教養人であり、文学・哲学の研究者であったテーヌにとっては、旅行案内記は未知のジャンルであった。

5. テーヌの *Voyage aux Eaux des Pyrénées*

旅行案内記の理想とは、目次から目当ての場所の記述が読めることであろう。目次はその役割を担っていることから、テーヌの *Voyage aux Eaux des Pyrénées* の目次を引用しよう。

一章「ポー — ポーからオー・ボンヌへ」

ポーへの到着 — 原始的な荷車 — 城 — アンリ4世 — 16世紀の生活 — 戦争と舞踏会 — 公園 — 高台、ピレネーの見晴らし、アンリ4世の銅像 — 乗合馬車 — よくいる御者 — トウモロコシ — 風景 — ビトベ — オッソ渓谷

二章「オー・ボンヌ」

家具付きホテルの村 — 雨の一日 — 音楽家たち — よい胃の効用 — 天気の日 — 戸外サークル — ブナの木 — 騎馬行進（にぎやかな一隊） — 夕方 — 風景 — アヒルの悲劇 — 舞踏会

三章「オー・ボンヌ郊外」

散歩で退屈する方法 — ディスコの滝 — 山岳地帯の様子と服装 — グロ＝エトル（大ブナ）の滝 — 山岳地帯の温泉 — ラレセックの滝 — 不毛地帯 — 野の風景 — ル・ガーヴ — 村々、墓場 — 斜面の森 — 蟻 — グルジ山 — 登山に反して — 山岳風景についての意見 — オー・ショード — 昔の熊狩り — ピック・ド・ミディへの登山

四章「オー・ボンヌ」の湯治客

温泉の効用 — 昔の湯治客 — よく聞く会話 — 病気と医者 — 理性の力 — ツーリストの分類 — 歩き雄弁なツーリストと従順なツーリスト、小市民ツーリスト、学者風のツーリスト、座るツーリスト

五章「住民」

耕作、収穫 — アスの祭り — 踊り — 山岳地帯の音楽についての意見 — ラランスの祭り — 境界 — 宗教行列 — 山の住民たちの無関心 — 下女とボタンとズボンの物語 — モリエールの下女

六章「昔のベアルヌ」

ベアルヌ地方の歴史家ピエール・ド・マルカ — 彼の発見 — ロンスヴォーの歌 — オッソ人の昔の美德 — 十字軍兵士ガストン — ベアルヌ伯の政治 — アンリ 4 世のベアルヌ人的性格 — ガシオン元帥 — ベルナドット

七章「ポーからリュズへ」

大きな山の性格 — コアラーズ城 — オルトンの伝説 — ベタラン礼拝堂 — サン＝ペ — 11 世紀の修道院の設立 — ルルド — 城 — ピエール・エルノの殺害 — 14 世紀の男と現代の人々 — 乞食 — ピエールフィット峡谷 — 人質 — 大理石の橋 — リュズの野

八章「リュズ、サン・ソヴール、バラージュ、コトレ」

リュズ — 市場 — 教会 — 見にくいものの愛 — 峡谷の中心リュズ —

九章「遠足と登山」

ガヴァルニに行く必要 — 埋葬 — 朝の霧 — シア橋 — 旅行者たち — ジェドル洞窟 — 岩の沼 — シニスト山 — ガヴァルニ谷 — 菖蒲 — 雪の橋 — 曲芸 — 滝 — 小屋 — 夕食をとる人たち — ベルゴンズ登山 — 山の上からの見晴らし — ピレネーの形成 — ピック・ド・ミディ登山 — ある旅行者の不運 — ラモン — ペルデュ山登山

十章「植物と動物」

ブナ、松、ツゲ、花、苔 — 熊についての手紙 — 勧められることの危険 — 熊狩りとピレネーの野生山羊狩り — テーブルにつく山羊 — 山羊たち — 動物の中で一番幸せなもの — トカゲ

十一章「リュズからバニェール・ド・ビゴール」

ミディの空 — 野の風景 — ベナック城 — ボ・ド・ベナックの伝説 — タルブ — 教会、裁判所、種畜場 — 1570 年の包囲 — ラバスタンの包囲 — タルブからバニェール・

ド・ビゴールへの道 — バニェール・ド・ビゴール — パリの側面 — 小川 — 内部の風景 — 麦打ち — 大理石加工業 — 温泉 — モンテーニュの意見 — 昔の湯治客 — 散歩 — 夕方のとうもろこし畑

十二章「バニェール・ド・ビゴールへの道」

屋上階で旅行する必要 — 大衆風俗の光景 — エスカラディユ — モヴォワザン城 — アンコース — シャベルとバシヨールモンの旅 — ピトレスクな衛兵の耳と背中 — リュシオン谷

十三章「バニェール・ド・ビゴール — ツールーズ」

もし湯治生活が詩的だったら — サロンのカタログ — 温泉 — ル・プレの源水 — 歌の演奏があるカフェ — 野外カジノ — ミディの人々の叙情的天才 — ポスター — タイプ — 夕方の谷 — 川 — 鉄分を含む泉 — 砕けた山 — 女乞食 — 百合の谷間 — シュペール・バニェール登山 — 放牧 — ラ・マラデッタ登山 — 出発 — 野と耕作 — 村の中 — ツールーズ — サン＝テチエヌ教会 — 1027年における礼拝堂付き司祭のげんこつ — 美術館・博物館

十四章「諸情報」

ホテル — 温泉 — 移動方法と遠足 — 予算

第十四章がガイドブック本来のお役立ち情報である。ホテルの料金、ガイドについて、温泉の性質、遠足の時間や回数など、実地で使える情報であり、通常、旅行記には記載されない情報である。

旅行ガイドブックは、19世紀半ばから、鉄道の車中でも楽しめるように、「読む」部分以外に「見る」挿絵が付け加わったと前述したが、本ガイドにもギュスターヴ・ドレの挿絵がついている。

テーヌがガイドブック執筆に苦勞したことは、友人や家族への書簡からうかがい知ることができる。旅行後に300頁のガイドブックを完成させるために、あらゆる資料を参照している。例えば、テーヌは湯治場オー・ボンヌの記述で、娯楽施設や宿泊施設の建設のために、「この不思議な村は、山の狭間に位置して、息も詰まりそうだから、とても苦勞して、毎年、村の規模を拡大しようとしている」⁽¹¹⁾と、湯治目的の宿泊客誘致についても述べている。

6. テーヌの *Voyage aux Pyrénées*

こうして刊行された、テーヌの手によるガイドブックがベストセラーになった。よく書けていると評価したルイ・アシェットはテーヌに、*Voyage aux Eaux des Pyrénées* から実用的な情報を削除し、旅行記として自分の印象を書いてみてはどうかと勧める。

旅行記は1858年に *Voyage aux Pyrénées* として出版された。その間、テーヌはふたたび1855年7月にピレネーを再訪する機会を得ている。その際には前回同様、オー・ボンヌの温泉に滞在している。そして1856年には太平洋岸の避暑地ビアリッツにも滞在し、そこで書かれた書簡が、*Voyage aux Pyrénées* に収録されてもいる。つまり、*Voyage aux Eaux des Pyrénées* 刊行の後、2度のピレネー滞在で取材した内容も盛り込み、*Voyage aux Pyrénées* として世に問うたことになる。

ガイドブック *Voyage aux Eaux des Pyrénées* では、ノウハウを伝授するという前提のもと、読者に向けて書かれている。最初から最後まで、文を読むのではなく、目の保養にもなるように、ふんだんに挿絵がついている。一方で、旅行記 *Voyage aux Pyrénées* の方では、「お年玉」用（贈り物として）の豪華版には挿絵がつくものの、挿絵なしの版も出版された。つまり、文学として本を読むことも想定されている。

「アシェットは挿絵なしの版と、挿絵つきのお年玉豪華版の2種類の版を印刷し」ているが、「行商のための検閲はやっかいだ。鉄道で売るために適応させなければならない」⁽¹²⁾とテーヌ自身が述べている通り、1858年刊行の第2版では挿絵なし、1860年刊行の第3版は、ギュスターヴ・ドレの挿絵入りである。1910年にはアシェット社から第18刷が出て、2019年には別の出版社から廉価版が発売されるというロング・ベストセラーとなる。

Voyage aux Pyrénées の構成は、*Voyage aux Eaux des Pyrénées* から大幅に変わっている。ガイドブックにはなかった、友人マルスラン（エミール・プラナ）への献辞がつき、ガイドブックでは取り上げられなかった都市や地域が加わっている。目次を引用しよう。

一章「海岸地方」一. ロワイヤン—河—ボルドー、二. ランド地方—バイヨンヌ—ペ・ド・ピュイアンヌの物語、三. ビアリッツ—海—サン＝ジャン・ド・リュズ—17世紀の祝祭

二章「オツソ川流域地方」一. ダックス—人々—オルテーズ—フロワサード—ガストン・ド・フォワの物語、二. 風景—ポー—16世紀の風習—オー・ボンヌへの道、三. オー・ボンヌ—湯治客の生活、

三章「風景」一. 風景—山岳地方の視点から、二. オー・ショード—異教の神々の誕生、三. 住民—現代人、いにしえの人

四章「リュズ渓谷」

一. リュズへの道—オルトンの伝説—ピエールフィットの行列、二. リュズ—風習—サン・ソヴール—風景、三. バレージュ—17世紀における風景、四. コトレ—ゴープ湖—マルグリット・ド・ナヴァール—16世紀における恥じらい—人質、四. サン＝サヴァン—中世における修道士の生活、五. ガヴァルニ、六. ル・ベルゴンズ—ピレネーの起源と形成—ピック・ド・ミディ、七. 植物と動物

五章「バニェールとリュッシュ」一. リュズからバニェールへ—ボ・ド・ベナックの物語—タルプ—ラバスタンの包囲、二. バニェール・ド・ビゴール、三. 人々—サロンと散歩—ツーリスト—舞踏会、コンサート—教育における音楽—ある一匹の猫の人生と意見、四. リュションへの道—モンヴォワザン—アンコース—17世紀における小市民の幸福、五. リュション—シュベール＝バニェール—ヴェナスク港とラ・マラデッタ、六. トゥールーズ—美術館・博物館

となっている。

Voyage aux Eaux des Pyrénées の目次と比較することで、この旅行記の地理的広がり、テーマの展開が読み取れる。旅の終わりは同じトゥールーズであるが、起点が異なっている。そして、旅行記の冒頭に置かれた献辞では「いままで多くの人々がピレネー地方について書いているが、それは、概していえば、書齋の産物だった」⁽¹³⁾と述べ、実際に現地に踏み入れ、そこで見聞きし、感じた内容を記述していることを強調している（実際には本からの情報を借用している箇所がある）。

また、文体への配慮も見られる。ラマルチヌの文体を学ばなければならないと、テーヌは妹ソフィーへの書簡に記している⁽¹⁴⁾。バルザックとスタンダールが好きだと繰り返し言及している⁽¹⁵⁾。「理想や一般論を描く代わりに、独特な現実を描く文学には無限の未来がある」⁽¹⁶⁾とも述べ、詩的な文体と、現実を描く文学、すなわち写実的な文学の融合の方向性に言及している。

7. *Voyage aux Eaux des Pyrénées* と *Voyage aux Pyrénées* の比較

ガイドブックは、目次や索引から、場所についての情報を引くことができる。ガイド

ブックを使う人の便利を考えて執筆、構成されている。一方、旅行記には筆者＝旅行者の「行程」が書き込まれている。旅行記の登場人物なら一度行ったところであっても、戻ることでもでき、登場人物（語り手）の起伏に富んだ旅を物語ることができる。テヌが1854年、1855年、1856年の3回にわたって行った旅が、ひとつの旅に集約して描かれ、*Voyage aux Pyrénées* の虚構の旅を作り上げている。

テヌの書簡から読み取れることは、初回の旅では旅行案内記の取材の目的もあり、精神的余裕がなかったが、2回目、3回目の旅行では、温泉の効果があつてのことか喉の痛みも快復に向かい、景色を眺める余裕ができたということだ。こうして、自然という芸術を観察し、*Voyage aux Pyrénées* では自然を謳歌する語り手＝主人公の je「わたし」を演出している。テヌは母宛に送った手紙で、逸話や風景の描写を行っているが、3年後にそれを旅行記に組み入れている。

加筆した部分以外では、すでに刊行したガイドブックの記述に大幅な変更はなく、個人の印象記の性格を強めるように、新たに章が付け加わる。

また、ガイドブックから旅行記にそのまま流用した一節において、反＝ガイドブックの美学が述べられていることも、注目に値する。

散歩に出て、退屈する方法は、あらかじめ目的地のことをよく知っているか、あるいは目的地へ行く道がわかっているからである。あらかじめ想像を巡らすのでは、風物の新鮮さをだいなしにする。想像力が勝手に働いて、自分好みのイメージを作り上げる。それで、実際にその場所に行ってみると、予想はことごとく裏切られ、気分は減ってしまうためだ。実際に目のあたりにしたときの風物の美をそこなうことになる。それは、心の中にあらかじめ一つの美が存在し、それが他の美の介入を許さないからだ。⁽¹⁷⁾

ここで特記すべきは、旅行に有益な情報が入手できる旅行案内記の記述で、旅行案内記が不要であるともとれる見解を述べていることである。旅行案内記で、ある意味、旅行案内記を持たないことを読者に勧めているという、逆説に留意したい。

続いて、ガイドブックの読者 vous から、旅行記の登場人物（語り手）je への主体の転換が行われている例を、以下に見よう。

Si vous voulez trouver du plaisir à vos promenades, partez seul, par le premier sentier venu, et allez devant vous au hasard, jusqu'à ce que vous soyez las. Pourvu qu'on ait

remarqué deux ou trois points saillants, on est sûr de retrouver la route. Vous aurez les jouissances de l'imprévu, et vous ferez la découverte du pays. (下線部は筆者による)

旅行記では、

« J'ai voulu trouver du plaisir à mes promenades, et je suis parti seul, par le premier sentier venu, allant devant moi au hasard. Pourvu qu'on ait remarqué deux ou trois points saillants, on est sûr de retrouver sa route. On a les jouissances de l'imprévu, et l'on fait la découverte du pays. » (下線部は筆者による)

ガイドブックから旅行記への書き換えにあたって、ガイドブックで読者に促されていた一人で目的なく歩く行為は、旅行記で語り手＝登場人物の行為となり、最終的にはそれが読者や人類と共有されて、普遍的な事項として書き込まれている。

オー・ボンヌについて、テーヌは「退屈」だと述べていた。ひるがえって、同時代の温泉ガイドブックを参照すると、「オー・ボンヌの滞在は快適である」⁽¹⁸⁾と記載されている。どこまでが主観的で、客観的な記述であるのかは、テーヌにおいてほとんど問題にされていないことがわかる。

旅行記では、語り手＝登場人物はひとりで行動する人物として描かれている。孤独者の散歩はルソー以来の、自然観察と哲学が結びついた旅人のタイプであるが、叙情的な語り手の役割を強調するために、テーヌは旅行記で、孤独な散歩者という人物造型を行う。

ガイドブック *Voyage aux Eaux des Pyrénées* には、旅で出会うであろう雑多な人物たちが登場し、さまざまな湯治客、観光客の例を紹介していた。一方、旅行記では、現地での知り合い、旅の道連れとなったポール (Paul) が体験したこととして、逸話が再構成される。ポールは「勇敢な旅行者で、大の絵画愛好家」であり、信用できるのは自分自身しかないというのが口癖のとても風変わりな男」であり、「理屈っぽく、逆説に満ちた自分の意見をいささかも曲げない」。50代だが、20代の生気がみなぎっている。叙情的な登場人物＝語り手の分身としてのポール (Paul) という道連れに、語り手とは異なる意見を述べさせ、語り手との対話を導入することで、ガイドブックの散文的なテキストが、*Voyage aux Pyrénées* においては、ロマネスク空間へと変容している。

8. 反 = 観光

テーヌは *Voyage aux Eaux des Pyrénées* においても、*Voyage aux Pyrénées* においても、人と同じ行動をとる「観光客」を揶揄している。不慣れな土地を旅するとき、必要なのが現地ガイドであるが、テーヌは決められた道を進むのではなく、思い思いに探索したり、迷うことで新しい発見があると述べる。*Voyage aux Eaux des Pyrénées* にはたびたび現地案内人（旅行ガイド guide）が描写され、実際にピレネーでは現地案内人がなりわいとして成立していることをうかがわせる。*Voyage aux Eaux des Pyrénées* には、guide（現地案内人の意）が63回登場する。そして、現地に着いて困難なことといえば、現地案内人を見つけることではなく、現地案内人を追い払うことだと述べる⁽¹⁹⁾。実際、現地案内人は乞食や商人と同列に扱われていて、語り手はその質の低さを嘆いている。*Voyage aux Pyrénées* では guide（現地案内人の意）の語の使用頻度は20回に減っているが、これは、現地ガイドに導かれた旅として書かれていた旅行案内記が、個人の物語として描かれることの変更によるものである。散文的な現地ガイドを、個人の印象記から大幅に排除した結果である。

前述のポールが過去の体験を語るとき、「道案内人がある家族にあそこに見えるのがトゥールーズだと指さして、家の主も子供もそれにならって「あれがトゥールーズだ」と喜ぶ様を描写する。

次に *touriste* の語に着目しよう。1840年前後から、*touriste* の語が頻出するようになり、『フランス人の自画像』でも類型化がされていた。テーヌも *touriste* を6つに分類している。もともと *touriste* は、グランドツアーで大陸を旅する英国人（「旅」*tour* 「～をする人」-ist）を指し、フランス語化（人を表す名詞に接尾辞 *e* がついた形 *touriste*）となった。テーヌも *touriste* の原義への言及は忘れない。そして *touriste* の行動の不適切さが *touriste* 自体の本性と理解され、侮蔑的なニュアンスが付加されたのであった⁽²⁰⁾。

Voyage aux Pyrénées では、湯治に来ている客が美しい山岳風景を見ないことについて、ポールは、「山の表情が多様であればあるほど美しさも多様になる」と述べる。つまり、画一的にしか風景が見られない観光客を揶揄するのである。

別の箇所では、テーヌの語り手は、湯治客が交わす会話や、観光客のタイプを分類している。*Voyage aux Eaux des Pyrénées* にも分類はあったが、この一節は大きく書き換えられた。*Voyage aux Pyrénées* では、第一類：出歩くツーリスト (*touristes marcheurs*)、第二類：従順なツーリスト (*touristes dociles*)、第三類：家族連れツーリスト (*touristes en famille*)、第四類：食事にうるさいツーリスト (*touristes dîneurs*)。第五類：学者風の

ツーリスト (touristes savants)、第六類：部屋に籠もるツーリスト (touristes sédentaires) である。第一類は、道案内人やホテルに詳しく、旅の印象記を書いている。第二類は片時も旅行案内記を離さず、これが掟とも予言ともなる。第三類は、絵心のある者は写生をする。第四類は、生まれて初めての観光旅行をする家族の例が引き合いに出されている。第五類は、めったにいないタイプである。第六類はイギリス風の庭へ、庭から散歩道に移動するが、昼寝をしたり、新聞を読んだりして合間にピレネーの山々を眺めるというタイプである。

この分類の第一類「歩く人 (marcheurs)」からは、『孤独な散歩者の夢想』のルソーや『アルプス徒歩旅行』のテプフェルの系譜が想起されるが、現地の情報に精通していて、ステレオタイプのような旅の印象記を記す *touriste* のタイプである。*touriste* は旅行案内記で情報を仕入れ、旅行記からモデルを写して、自ら旅行記を生み出す。新興観光地におけるこれらの *touriste* の分類化と明文化は、1850年代においてアクチュアルな *touriste* 像を定着することになるだろう。*Voyage aux Pyrénées* が現在まで版を重ねて読み継がれていることを考え合わせると、テーヌが描く *touriste* が *touriste* の典型を形成することに貢献するのである。

おわりに

19世紀には、アルピニズムの名が生まれるきっかけとなったアルプス、そしてスイス、ロマン派の文学者たちが描写するライン河が観光地となっていた。旅行案内記(ガイドブック)もこれらの地域については詳しく書かれることになるのだが、文学では、アルプスについてはルソーが、ライン河についてはユゴーが、ロマン派の記念碑的作品を発表していたことが、それぞれ観光地化に寄与していたのである。一方、ピレネーについてテーヌ以前に詳細に書いていたのは、ニザールを除くと、ラモンのみである。以上、論じたように、テーヌにおいて、旅行案内記と旅行記の境界は必ずしも明確ではないが、これは、旅行案内記が読み物として旅行記のように読まれていたこと、逆に旅行記が旅行案内記のように読まれていたこと、つまりジャンルが未分化であったことに帰着する。アシェット社が旅行案内記を模索していた時期には、個性的な旅行案内書も存在しえたとも言えるし、それが旅行記との区別を難しくしているのである。テーヌにおいては、ピレネーの旅行案内記には記されなかった文学者としての語り手が、旅行記で頭をもたげはじめたことは明白である。書き改めた旅行記に、作者が自然に包まれる高揚感や幸福の感情を取り入れることで、ロマン派的傾向の強い旅行記を世に問うことになった。テーヌは自然それ自体と、人間と自然の交信を旅行記に定着させることで、文学作品の永続を願ったのであろう。

テースの旅行記において、叙情的な感情の発露がロマン派的性格を方向づける一方で、逸話に込められた自虐的姿勢、諧謔、逆説、嫌みのないからかいと皮肉があいまって、読者を楽しませ、ツーリストの自画像へと送り返す。自伝的であり、かつ虚構にも根ざすという混淆的なジャンルである旅行記の、脱線の特性をテースは十全に生かしている。文学を批評的に研究していた若きテースの文学実践例としても、*Voyage aux Pyrénées* のひとつの読み方を示すことができるだろう。

注

- (1) 以下、参考文献を示す。François Léger, *Le jeunesse d'Hippolyte Taine*, préface de Philippe Ariès, Albatros, 1980.
- *Taine au carrefour des cultures du XIXe siècle. Colloque organisé par la Bibliothèque nationale et la Société des Études romantiques et dix-neuviémistes*. 3 décembre 1993. Textes réunis et présentés par Stéphane Michaud avec la collaboration de Michèle Le Pavec. « Les colloques de la Bibliothèque nationale » 7, PUF, 1996.
- « La littérature de voyage », *L'Année 1855*, Études romantiques et dix-neuviémistes, sous la direction de Pierre Glaudes et Paolo Totrone, Classique Garnier, 2015, p. 263.
- Lieux communs du voyage. Dossier sous la direction de Sylvain Venayre et Anne Gaele-Weber*, « Les Cahiers du XIXe siècle » 5, Éditions Nota Bene, 2010.
- Adolphe Guilhou, *Tableaux historiques et descriptifs des Eaux-Bonnes et ses curiosités environnantes. Guide des malades et des voyageurs qui visitent cette contrée des Pyrénées*, Cahors, Layton, 1858.
- Guide pittoresque. Voyageur en France*. Route de Paris à Bayonne. Département des Basses-Pyrénées.
- Dominique Jarrassé, « Chapitre 15. Représentation de la ville d'eaux. Statut de l'image des guides thermaux français entre 1840 et 1870 », *Les guides imprimés du XVIe au XXe siècle*. Villes, paysages, voyages. Textes réunis et publiés par Gilles Chabaud, Évelyne Cohen, Natacha Coquery, Jérôme Penez, « Mappemonde », Belin, 2000, pp. 207-220.
- Jérôme Penez, « Chapitre 16. Guides imprimés et thermalisme en France. 1850-1914 », *ibid*, pp. 221-238.
- Bernard Toulhier « Chapitre 17. L'influence des guides touristiques dans la représentation et la construction de l'espace balnéaire (1850-1959) », *ibid*, pp. 239-258.
- Renaud de Bellefon, « Chapitre 18. Des autochtones pris dans les filets des guides-livres : les guides de montagne (XIXe-XXe siècles) », *ibid*, pp. 259-270.
- テース『ピレネ紀行』杉富士雄訳、現代思潮社、1973年。
- (2) *La Guide des Chemins de France*, Charles Estienne, 1552, <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k102662d/f2.item>
- (3) Paris, Chassaignon, 1817.
- (4) 『鉄道旅行の歴史』十九世紀における空間と時間の工業化、ヴォルフガング・シベルブシュ著、加藤二郎訳、法政大学出版局、1982年、p. 83.
- (5) 『レジャーの誕生〈新版〉上』アラン・コルバン著、渡辺響子訳、藤原書店、2010年、

- p. 102.
- (6) テーヌの湯治の計画は以下の書簡に示されている。「À M. Cornelis de Witt, Paris, 27 mai 1854 », Hippolyte Taine, *Sa vie et sa correspondance*, t. 2, p. 54.
- (7) « À Édouard de Suckau, Eaux-Bonnes 15 août 1854 », *op.cit.*, p. 74.
- (8) « À Madame Letorsay, Paris, octobre 1854 », *op.cit.*, p. 76.
- (9) *Ibid.*, p. 76.
- (10) « À Madame Letorsay, Paris, octobre 1854 », *op.cit.*, p. 77.
- (11) « Ce singulier village essaye tous les ans de s'étendre, et à grand'peine, tant il est resserré et étouffé dans son ravin. » Hippolyte Taine, *Voyage aux Eaux des Pyrénées*, Hachette, 1855, p. 20. (以下 VEP と略記)
- (12) Hippolyte Taine, *Sa vie et sa correspondance*, t. 2, p. 164.
- (13) Hippolyte Taine, *Voyage aux Pyrénées*, Hachette, 1858 [3e édition, 1860], p. v. (以下 VP と略記)
- (14) « À Mademoiselle Sophie Taine, 9 octobre 1853 », Hippolyte Taine, *Sa vie et sa correspondance*, t. 2, pp. 11-12.
- (15) À J. -J. Weiss, Paris, 25 janvier 1858, *op.cit.*, p. 158.
- (16) *VP*, *op.cit.* p. 48.
- (17) « Le moyen de s'ennuyer est de savoir où l'on va et par où l'on passe l'imagination déflore d'avance le paysage. Elle travaille et bâtit à sa façon ; en arrivant il faut tout renverser cela met de mauvaise humeur. L'esprit garde son pli la beauté qu'il s'est figurée nuit à celle qu'il voit ; il ne la comprend pas, parce qu'il en comprend une autre. » *VEP* p. 36 ; *VP* p. 96.
- (18) *Guide pratique aux principales eaux minérales de France, de Belgique, d'Allemagne, de Suisse, de Savoie et d'Italie : contenant la description détaillée des lieux où elles se trouvent, ainsi que la composition chimique, les propriétés médicales et le mode d'emploi de ces sources ; suivi de quelques considérations sur les étuves, les bains de gaz et les bains de mer* par le Dr Constantin James, Paris : V. Masson, première édition, 1851, p. 33.
- (19) *VP*, *op.cit.*, p. 265.
- (20) Touristeについては以下の論文を参照。田口亜紀「旅行者かツーリストか? : 十九世紀前半フランスにおける“touriste”の変遷」『共立女子大学文学部紀要』第60集、共立女子大学文学部、2014年1月、pp. 17-34。

付記

* 本研究は日本学術振興会 (JSPS) 科研費・基盤研究 (C) 17K02599「近代フランス出版文化の言説における「観光」の視点の形成」(研究代表者: 田口亜紀) の助成を受けた。